

NZ 研修の復活願う

親子二代で参加も

江戸川大学学生新聞

THE EDOGAWA TIMES

第115号

2021年10月21日(木)

取材／編集：学生記者クラブ
発行：江戸川大学企画総務課



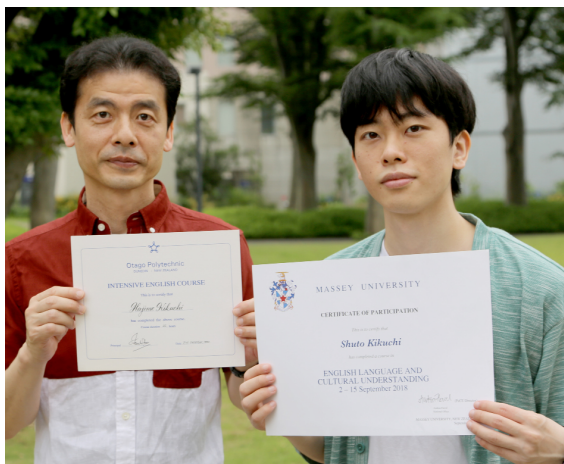
江戸川大学 オンライン駒木祭
2021/11/2-3
YouTube LIVE配信

オンライン駒木祭

11/2 (火)、11/3 (水・祝)

12:00~17:00 予定

<YouTube Live>



菊地肇さん（父） 菊地柊斗さん（子）



柊斗さんとホストファミリー

開学時からの伝統

1990年の江戸川大学開学以来、「ニュージーランド研修」として親しまれてきた異文化理解研修は、多くの学生を海外へ送り出してきた。しかし、プログラムの中心をなす学生の海外派遣は、コロナ禍のため、ふた夏実施されていない。海外研修の早期復活を願うかつての参加者にそれぞれの思いを聞き、歴史を振り返る。

時代を隔て共通体験

江戸川大学1期生の菊地肇さん（社会学部（現・メディアコミュニケーション学部）マス・コミュニケーション学科卒）は、1990年に1期生としてニュージーランド南島のダニーデンにあるオタゴ大学での研修に参加した。ニュージーランドでまず感じたのは日本との時間の感じ方の違いだった。日本では当たり前のように見る電車の遅れ

を気にする人や、時計を見ながら自転車を全速力で走らせている学生を目にしなかった。ニュージーランド人の生活に触れ「日本でももっと時間に余裕をもって好きなことが好きなだけできるようになればいいな」と考えるようになったという。

2018年、菊地さんの息子の柊斗さん（社会学部人間心理学科4年）もニュージーランドへ渡った。父とは違う北島の大都市オークランドに確かだ。

研修で得たもの

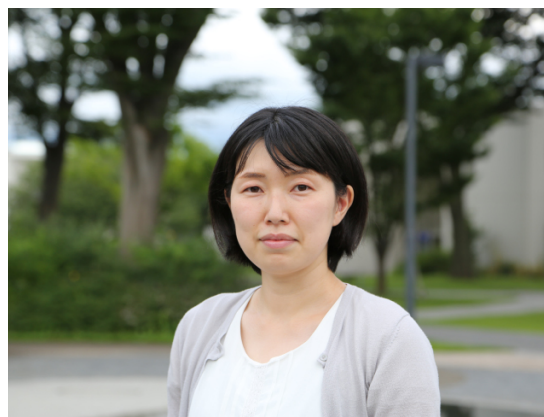
滞在したが、それでも最も印象的だったのは自然の豊かさだったという。ニュージーランドは車が少なく、緑が生い茂り、都市にいながら自然の豊かさを感じた。

研修では失敗でさえいい経験になる。柊斗さんは、出先でホストファミリーを迎えに来てくれるということをすっかり忘れ、家に帰って玄関を開けようとしてホームセキュリティを鳴らしてしまったことがある。「ハブニングさえもいい思い出です」と振り返る。

肇さんは、ニュージーランドで精神的なものを得たと強調する。社会人になったころ、日々何かに追われ、仕事のためだけに生きているように感じていたという。転職に際して、海外研修で見た家庭生活を重んじるニュージーランドの人々の生活を思い出した。仕事だけではなく、自分の生活を大切にすることでより豊かになるという当たり前のことに気づけたのは、学生時代のニュージーランド研修の経験があったからだだった。

世論調査の結果を基にした国連の世界幸福度ランキング（2021年版）で日本は56位。いわゆる先進国の中では低い方だ。ニュージーランドは8位。これが肇さんの感じた差かもしれない。（小島大翔、吉田妃麻里 2面に続く）

学びに直結、 こども学科のNZ体験



大塚紫乃先生

メディアコミュニケーション学部こどもコミュニケーション学科標準教授の大塚紫乃先生は、ニュージーランドで保育施設を見学する「海外子ども事情体験」の引率を2018年まで担当した。こども学科のグループでは、全学科共通の異文化理解研修に加えて、保育施設見学も実施され、現地の子どもたちとの触れ合いもあった。

海外の保育施設を見るメリットは、何といっても違いを感じるからだ。大塚先生は「日本らしさとは何かを感じる

が、ニュージーランドの現状を見て日本の良さにあため

て気づくことも少なくない。

大塚先生は学生の引率で初めて学生とともに過ごして「参加者のほとんどは英語が得意でない。話せなくても積極的にコミュニケーションを取りにくいこと」が海外研

修の鍵だと説明する。

ニュージーランドは治安が良く、江戸川大学はマッセイ大学をはじめとする各大学との長い交流がある。大塚先生は「まずはこの研修のことを知っていただきたい。これからは国際理解がより重要になってくる。世界に目を向ける最初のステップとしてニュージーランドはお勧めの国。大学のサポートがあるうちに体験してほしい」と笑顔でプログラムの強みを推す。(星野愛奈)

途絶えることの ないつながり

江戸川大学卒業生で、現在学生課の課長として大学運営を支える宮川実樹典さんも、ニュージーランド研修の参加者だ。研修が必修科目だった当時は学生約400人と教員で、飛行機はほぼチャーター状態だったという。

実は宮川さんは、高校2年生の時に交換留学生としてニュージーランドに滞在した経験があり、研修での渡航が初めてではなかった。最初のホストファミリーとは、今でも連絡を取り合っているとい

う。インターネットがなかった時代に電話や手紙で始めたやりとりは、現在ではフェイスブックやEメールで続いている。ニュージーランドは10回以上訪れており、そのたびにホストファミリーのお世話になっている。

宮川さんは研修について「自分が変わるチャンス」と話す。日本とは全く違う価値観や生活を経験することが参加の意義である。戸惑うこともあるだろう参加者へのアドバイスは「行けばなんとかなりますよ」だ。宮川さん自身、英語は苦手だった。しかし、ホストファミリーはそんな宮川さんの伝えたいことを受け止め、正しい英語を教えてくれた。2週間程度で耳が慣れ、3週間経つとある程度意思を伝えられるようになった。

ホストファミリーに出会って感じたことは、絆の強さ。その絆は、異国から加わった宮川さんも含むものだ。片言の英語を最初から我慢強く聞いてくれたのも、家族の一員であるという意識の表れだった。「完全に価値観が変わる」と語る宮川さんの口調は熱かった。(工藤謙真)

学生へのメッセージ (1面から続く)

肇さんがニュージーランドへ行った1990年は第3次海外旅行ブームのさなかで、インターネットもスマートフォンも持たない学生たちがガイドブック「地球の歩き方」などを手にどんどん海外へ出た。2020年以降は新型コロナウイルスの影響により海外渡航が制限され、異文化理解研修も延期となった。出国者在留管理庁によると、出国者数は第1次オイルショック後の1970年代半ばと同じレベルだという。しかし海外へ行き学びたいという学生はたくさんいるのだ。その学生たちに肇さんは海外研修の1期生として、柊斗さんは在学中の海外研修経験者としてメッセージを伝える。

肇さんは「自分の英語力に不安は持たなくて大丈夫。中学1、2年の基本的な英単語があればあとは自然と身に付きます。4年間、悔いが残らないように好きなことを好きなだけやってください」と海外へ飛び立つ日を待つ後輩にエールを送る。柊斗さんは「難しいことは深く考えず、行き当たりばったりでなんとかします」と後輩を元気づけ「海外のお寿司屋さんに行って日本の醤油と海外の醤油の味くらべをしてみてください。とても面白い味ですよ」と笑った。

28年の時を経て海外での学びを経験した2人は、ともに開学以来の伝統の復活を祈っている。(小島大翔、吉田妃麻里)